

学振特別研究員申請書
書き方講座指導のポイント

佐藤勝昭

自己紹介

- 私は、1966年京大(工)の修士課程修了後、NHKに入局、大阪放送局の現場を経験した後、NHK基礎研で放送技術につながる基礎研究を行い、研究成果をまとめて京大に学位論文を提出1978年工学博士号を授与されました。従って、**博士課程在籍の経験がありません。**
- その後1984年に農工大工に助教授として着任、1989年に教授、2005年に副学長(教育担当)を経験し2007年退職、JSTのさきがけ研究総括(2007-13)、研究広報主監(2007-18)、研究開発戦略センターフェロー(2008-18)などを経験し2018年JSTを退職しました。
- 科研費、学振特別研究員などの審査員を経験しています。
- 2018年から農工大のリサーチアドバイザーとして教員の科研費等競争資金申請、2019年から博士学生の特別研究員申請のお手伝いをしてきました。



今回の内容

学振申請書を添削する際に大切にしていること

選抜教員の先生方に特によくみてもらいたい点

学振申請書を添削する際に大切にしていること
(DC1,2共通-1)

- まず、**審査区分**選びが大切。
 - 審査区分には、いろいろな分野が含まれる。
 - たとえば、工学系52(電気電子工学・応用物理物性・応用物理工学およびその関連分野)では、電力工学、通信工学、電気電子材料、制御工学、薄膜・表面物性、結晶工学、光工学・光量子工学などが含まれる。どの区分で審査してもらうか重要。
 - 別の専門の審査員にあたったときでも、うまく研究の面白さ伝えると却って評価が高いことがある。
- 最初に**[研究の概要]**という項目を立て、申請者が博士後期課程で何をやろうとしているのかを2-3行以内でわかりやすく書く。
- 忙しい審査員は、[概要]を読んで理解できないと、後の項目を読んでくれない。専門外の審査員も読むので**特定の分野でしか通用しない専門用語は絶対ダメ。**

学振申請書を
添削する際に
大切にしている
こと
(DC1,2共通-2)

- [当該分野の状況・課題等の背景]は、ひとまとめにして**手短かに書く**こと。長いと忙しい審査員は読んでくれない。
- その分野の状況や課題を簡略に書き、課題の解決がなぜ必要なのか、これまで課題解決にどのようなアプローチがあったかを、**分野外の審査員にわかるような言葉で**簡潔に表現する。
- [本研究の着想に至った経緯]は、申請者の研究能力を推し量るために審査員が重視する項目である。しっかりと書こう。
- しばしば、「研究室では」「私たちは」の表現があるが、**あくまで主語は「申請者」で無ければならない**。

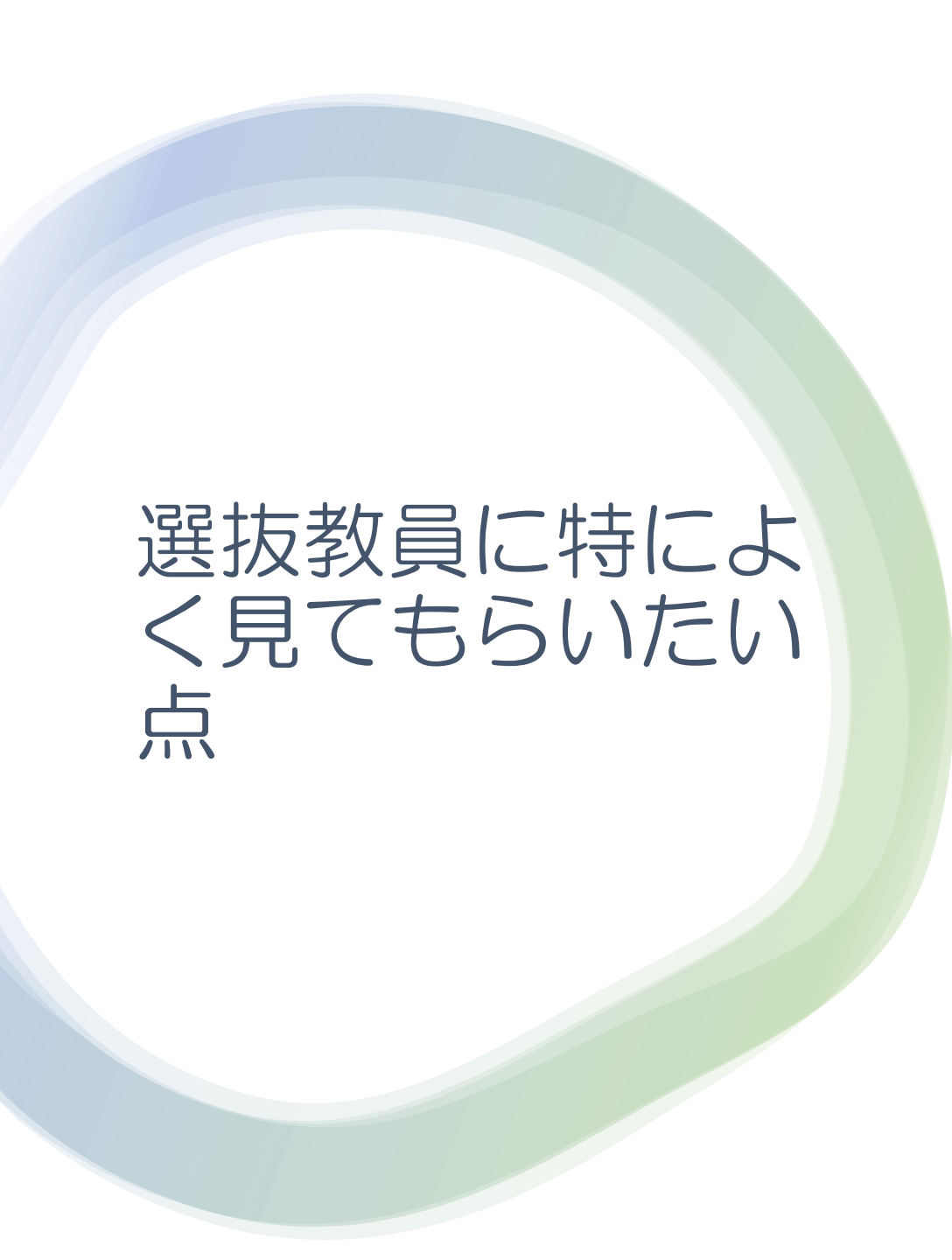
学振申請書を添削する際に大切にしていること

(1) DC1の場合

- 博士前期課程の段階で、後期課程の研究の詳細まで語るのは、むずかしいので、**指導教員とよく話し合うことが必要**。
- [着想に至った経緯]で、前期課程での**研究の中での気づき**、あるいは、**研究成果を踏まえての将来構想**が述べてあると、説得力がある。
- 査読付論文(審査中でも)があればベターだが、筆頭著者の学会発表があるとよい。

学振申請書を
添削する際に
大切にしていること
(2) DC2の場合

- DC1で不採択になったものの再チャレの場合、学振の評価レベルとコメントをよく読んで対応しよう。
- DC2は、博士論文に何を書くかということが明確になっていないとダメ。
- 研究室が連携している企業の下請けみたいな研究が見受けられるが「学術性」がないと判断されることが多い。
- 審査員が研究者の能力を判定するために、**査読付の論文が出ていることが望ましい。**
- 国際会議の招待論文も十分価値がある。



選抜教員に特によ く見てもらいたい 点

- シニア教員は、研究の第1線を退いているので、必ずしも最新の研究動向を把握していないので、現役の研究者として、シニア教員の指導を補って欲しい。シニア教員の指導に疑義があれば、はっきりと指摘して欲しい。
- シニア教員のカバーできる範囲は限られているので、選抜教員には。シニア教員の専門外の知識を補って頂きたい。特に、医用エレクトロニクス、知能ロボティクスなど学際性の広いテーマが増えているので、選抜教員とのタグが重要。
- 選抜教員は、農工大学生の現状を把握しているので、学生の知識レベルに合わせた表現などを補って頂きたい。

おわりに

本学において、学振DC2の採択が厳しくなっているため、きめ細かな指導が必要になっている。

シニア教員・選抜教員のタグだけでは、学際性の高い学問領域をカバーしきれないので、指導教員との密接な連携が必要である。

博士課程学生が、安心して研究に没頭できる環境作りに多少なりとも貢献できれば幸いである。